



観鵝小記

先師松本芳翠先生は、書の道を究めることで発成された全人格的なお方であり、昭和の書聖、書神として崇拜するにふさわしい先生です。 私は

以前書海社の事務局に勤務し、折に触れ先生の御温顔と崇高なお人柄に接し、更に書や諸々の道のお話を拝聴してまいりました。

そんな先生のお言葉が『書海』昭和四十年二月号より昭和四十四年四月号まで、『観鷺小記』として競書の講評欄の前に掲載されました。(昭和三十九年八月号より事務連絡が掲載されるようになり、その欄が先生のコメントに変わりました。なお、昭和四十一年一月号、昭和四十二年一月・二月・四月号、昭和四十四年一月・二月号は事務連絡でした。)

没後五十年を迎えようとする今、『観鷺小記』は先生が門下生にお訓しくださった唯一のお言葉であり、芳翠流を学ぶ私達の座右の銘となると確信し、これを現代仮名遣いに直して纏めました。

書きよい課題の時は、平均してみながうまく書けるので、今月はとてもうまく出来たと思っても、当選しないことがあり、むずかしい課題の時は、不出来だと思つて出しても当選することがある。そんな事を繰返しながら倦まずたゆまず続ける人が上達する。

昭和四十年二月号

有法の極、無法に帰すという語がある。結局無法でよいのなら、法に入る必要はないではないかと近代的に若くは西洋流に考えてか、世は無法の氾濫である。法に入つて法を出るのと、初めからの無法とはまるで違う。「有法の極」と続く所東洋独特の深味がある。

昭和四十年三月号

この頃、第三部の条幅が目立って成績をあげて来たのは喜ばしい。半紙は何分紙面が狭いので、筆法や結体は学べるが、文字の配置の研究には十分でないから、条幅によって章法の基本を学び、よくこれを身につけて、最後の仕上げをする必要がある。

昭和四十年四月号

文字を美しく書くためには、何千年という伝統の上に歴代の名人たちが、苦心を積重ねて来た。古碑帖を深く研究した人なら解る筈である。その上に立って更に新しい工夫を積んでこそ輝かしい進歩がある。それを無視したり、反逆したりでは退歩の外はあるまい。

昭和四十年五月号

書の本質がまだよくつかめない内に、誰かのいうことを聞きかじって、個性々々とめくら滅法に筆をふり廻す人もある。それでよいものなら、書の研究に多くの時間と労力を費やすことはない筈で、そんなのは個性ではなくて、野性に過ぎない。

昭和四十年六月号

前号で野性ということと言ったが、囲碁にも野性手というのがある。野性手は棋力のない人々を誤魔化すのに役立つことはあっても、定石をよく心得た棋力のある人には通じないから、少しも早くそれを改めないと上達を妨げる。書道でもそれと同じことが言える。

昭和四十年七月号

基本の点画がうまく出来ない内は、結体がよくまとまらず、一字一字の結体に自信が持てないようだと、布置、章法にまで心が配れない。それらの段階を漸次克服し、ほぼ卒業してから、初めて上達の曙光が見え、文字らしい文字が書けるようになる。

昭和四十年八月号

運筆と結体と布置章法にいかどの自信がついて来れば、何でも一通り書けるようになる。その上熟練によつて筆にゆとりが出来、紙面に渾然としたムードが醸成されるようになって始めて鑑賞に値する作品と言える。習練の大切な所以である。

ゆえん

昭和四十年九月号

近頃の書道展を、たまたま覗いて見ると、雑草の
ようなものばかりが時を得顔にはびこって、音楽で
いうならジャズ、ロカビリーの類が耳を声せんばか
り。静かに鑑賞して、身も心も洗われたなどの気分
は皆無だが、あれで宜しいのですか、とわが旧友は
歎く。

昭和四十年十月号

人の性はいろいろで、自分の好きなものを必ずし
も他人も好くとは限らないが、しかし富士山よりも
ゴミの山の方がよいという人はまずあるまい。まあ
何にしても、真に個性を尊重するならば、一時の流
行などに左右されず、本性の好むところに向って進
むがよい。

昭和四十年十一月号

嘗ての元旦、伊勢参宮をした際、五十鈴川の水を
掬^{すく}つて持帰り、墨池に漉^{そそ}いで書き初めをしたことが
あるが、誠に気分がよければかりでなく、これを密閉
して貯え、夏日臨池の用に供したところ、数日を経
ても墨汁が腐らなかつた。寒中の水の功德でもある
うか。

昭和四十年十二月号

何事でも、熟練してその仕事に自信がついて来る
ということは大変なことだ。我々の仕事は常に緊張
を要するけれども、緊張し過ぎて堅くなると、うま
く行かない。だから緊張のうちにもゆとりが必要で、
そのゆとりは、熟練によつてついた自信から生れる
ものだ。

昭和四十一年二月号

書には生氣がなくてはならぬ。書が観者に感動を
与えるのは生氣があるからだ。いかに形が立派でも、
寄せ木細工のような死物では困る。書に生氣を与え
るものは運腕の練達による筆の冴えと筆力筆勢で、
生氣を傷けるものは腕の未熟となぞつて筆勢を壊
すことだ。

昭和四十一年三月号

今、力をこめて手を振りおろしたとして、その力
は一瞬にして消えるが、墨のついた筆で紙上に同じ
動作をして一条の線をひくと、その線は消滅せず、
力強い線とスピード感を長く紙上に留める。習熟し
た書の筆画に生氣が漲みなぎるのはその為である。

昭和四十一年四月号

書の線は墨の色とその濃淡、運筆の遅速軽重等による力強さやスピード感など、色々の要素を含んで複雑な内容を持っている。それを形がよくないからとて、なぞったりすればそれらの内容が消されて、生彩がなくなり、文字が死んでしまうのである。

昭和四十一年五月号

楷書の筆画(行草をも含めて)は起筆終筆が判然と分れ、或いは刀剣の如く鋭く、長刀のようにそり、波のようにうねり、或いは鷲口のように尖り、手斧のように湾曲する。それらの変化と特質を十分に生かした上で、全体として程よき調和を保たせなければならぬ。

昭和四十一年六月号

まず用筆の法に熟し、次に結体のコツを呑み込んで、それに自信をつけ、更に布置の工夫に馴れ、いつでも全体のバランスがとれるようになって初めて全幅の文字が有機的に生き生きとした和やかな雰囲気醸成して、観る人に自然に話しかけるようになる。

昭和四十一年七月号

紙面に羅列された各々の文字と、それによって醸し出された空白、また落款がしてあればその文字と印章、引首印に至るまでの位置や大きさ、間隔など、すべてが快い譜調を保って一種の雰囲気醸成し、観る人に話しかけるようになれば、それは本物の書作品だ。

昭和四十一年八月号

文字には、それぞれその字本来の姿というものがあ
る。それは、その字の持つ点画によつて自然に備わ
つた形であるから、どこまでも尊重しなければなら
ない。個性々と人皆が、変わった形を作り上げよ
うとして、自然の形を損ずるのは、邪道という外は
ない。

昭和四十一年九月号

練達の書を見ると、いかにも颯爽と書いてあつて羨
ましいようだが、初歩の人がなまなかにそれを真似
ると薄っぺらで軽率で、どうにも見られない。円熟
すれば自然に出来るのだから、それは将来の課題と
し、十分慎重に一点一画じっくりと学ばなければな
らない。

昭和四十一年十月号

目や眉や、鼻や口や耳が、多少の相違はあっても、まずあるべきところにちゃんと備わっていれば、それはたしかに人間だが、そのあり場所が滅茶苦茶では、もはや人間ではないように、文字も書体によりそれぞれ約束があつて、それを破つては最早文字ではない。

昭和四十一年十一月号

人の面貌がそれぞれ変わっているように、持つて生れた性情もそれぞれ異っている筈だ。それを偽らず大切に育てあげてゆくのが個性尊重である。殊更に人と変わった作品を作り出そうとする近来の風潮は一見個性的に見えても、実は個性を没却した虚飾の天地である。

昭和四十一年十二月号

何事によらず巨匠名人の苦心というものは真に驚くべきものがあり、門外漢や一知半解の徒にわかる筈はない。けれども多年それを学んだり見たりしていながら、その機微に触れ得ないのは、矢張り精進不足と考え、心を潜めて努力を傾注しなければならぬ。

昭和四十二年三月号

「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」これは高山樗牛の残した有名な箴言だが、須は「須らく…すべし」と読む字で、この句も超越すべしが文法上正しいという人がある。然し、それでは結びに力がない。矢張り「せざるべからず」でなければとわたしは思う。

昭和四十二年五月号

“すべし”でも”せざるべからず”でも、響きに強弱の差こそあれ、主旨に変わりない。国運華やかな明治時代に「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と喝破した樗牛はえらい。不況極まる今の世に現代々と、矢鱈に現代を押し出そうとするのと妙な対照である。

昭和四十二年六月号

門下や親しい人々の書状は、裏を返さないでも発信人はすぐ知れる。同じ手本を習っていても、人面の如く夫々異なつた特徴を持つ。それが即ち個性である。殊更に人と変わった書を作ろうと心がけるのは自然でなく、自他を偽る造りもので、真の個性とは言い難い。

昭和四十二年七月号

病に臥して間もない頃の夢。傍らで習字をしながら
行届いた介抱をして呉れる小僧が突然「先生はなぜ
近頃の人のように曲った読めない字を書かれない
ですか」「性来曲ったことが嫌いでね」小僧はあとを
聞かず莞爾として(にっこりと笑って)去った。後姿
が白木みのるに似た男だった。

昭和四十二年八月号

近年にない猛暑と病後のため、書海社展を覗けな
かったのは遺憾だったが、大観は写真で知った。ま
ずすべてが読める作品であったこと、誤字脱字の少な
かったことも嬉しい。これらは古人に対する礼儀で
もあって、至極当然のことなのだが、それが近頃で
は珍しい。

昭和四十二年九月号

大は宇宙間の日月星辰の運行から、地上人類の葛藤、
さては鳥獣虫魚の境界に至るまで、それぞれ天然の
法則、自然の均衡が保たれて始めて平和が出現する。
書道の天地も決して例外ではあり得ない。磁気の嵐
にも似た滅茶苦茶流は一日も早く収まって欲しい
ものだ。

昭和四十二年十月号

近來書道誌をあれこれ繙ひもといて、お手本の粗末なのが
特に目立つ。随って当選清書も低俗だ。手本に規準
がなく、筆者の勝手書なのだから、習う方も戸惑う
のが当然。中で確しつかりした古典を学んだ清書だけが
光っているのも、よい手本の大切なことを立証して
いる。

昭和四十二年十一月号

同大の正方形をキチンと並べるのは誰にでも出来るが、形の一定でない、大小長短疎密様々のものを、うまく並べるのは一寸面倒だ。しかもそれが基本となつて更に変化が無限に生ずる。その基本を学ばずに、いきなり変化を求めるから滅茶苦茶なものが出るのだ。

昭和四十二年十二月号

一年の計は元旦にありという言葉がある。何事も計算通りにゆくものではないが、全然無計画ではない。ここで、一年の計画をつくりと定めて、怠らずそれを実行しましょう。たとえ三十分でも、毎日必ず筆をとること。毎月の競書は決して休まないこと。

昭和四十三年一月号

自信を持つということは、何事にも大切なことであるが、またその半面、自信過剰であってはならない。とんでもない間違いを犯すのは多くの場合自信過剰のためだ。自分は至らぬものだからと必ず反省して、悔を千載に残さないように心がけなければならぬ。

昭和四十三年二月号

人間はとかく面倒なことを厭^{いと}うて(いやになって)、放縦(何の規律もなく勝手にしたいことをする)に流れ易いものだが、若しも土俵という制限を撤廃したら、恐らく角力の興味は半減するのではないか。各種の運動競技や遊戯碁将棋のような勝負事に至るまで、それぞれ制限やルールがあつて初めて面白いのではあるまいか。

昭和四十三年三月号

有法の極、無法に帰するといつて、法は大切なものだが、いつまでも法に囚われ、束縛されてはいけない。その極致に到れば結局無法でよい。然し初めから無法では、更によりどころがなくてその道に入るよすが(縁)を失うからそれは最もいけないことだ。

昭和四十三年四月号

ここは斯うすればよいのだと言われても、すぐその通りにはなかなか出来ないが、何遍も繰返しやっていくうちに、出来るようになる。そうして一つ一つ覚えて、それを積みかさねて行く。はじめからどうやってもよいのだと言われたのでは、手のつけようがない。

昭和四十三年五月号

自分で少しも苦心することなく、いきなり教わったことは、時のたつにつれてとかく忘れてしまひ易いが、いろいろと苦心のあげく教わつたり、或は自身あるいで発見したことは一生忘れることがない。そうした苦心の積み重ねによつて基礎を築くのが成功の秘訣だ。

昭和四十三年六月号

せつかく本文はよく出来ているのに、落款の書き方が別人のように粗末であつたり、印が大き過ぎて位置のよくないものなどが、かなり多い。落款をよく本文と調和するように入れ、印を用いるものには適度の大きさの印を誤りなく押して、始めて作品は完成する。

昭和四十三年七月号

壊れた茶碗を惜しむのではない。人に見えぬ所まで見抜いてこそ宜い画が描けるのだ。誰にも見えてい
る敷居に躓くとは何事。見込がないから故郷へ帰れ。
とよく師匠から怒鳴られたと、某画伯は語る。並々
ならぬ注意力の必要なのは書の道ばかりではない
らしい。

昭和四十三年八月号

同じ手本のお清書を何枚も添削に出す人がある。ど
れが善いか自分では分らないというのだろうが、悪
いところが自分で分らない様ではいつまでたつて
も上達は覚束ない。手本と見くらべて悪い個所を改
め改めして、最後の一枚を清書とするのでなければ
ならない。

昭和四十三年九月号

子雀が巢立つまでには、繰り返し繰り返し羽ばたく練習をして、その間に羽も丈夫になり、飛び立つことが出来るようになる。それで習という字には羽が書いてあるのです。習字も同じこと、矢張り或る時間^あをかけて、回数を多く習わなければその効果は上がりません。

昭和四十三年十月号

第三部選評に「現存の人の書を、真似る場合臨とはしない」とあるについて、會員から質疑を頂いた。それは恐らく評者の思い過しであらう。他人の作品をそのままに真似る場合古人今人を問わず、臨又は模と断るのが当然と思われるので、御答え旁(一方で)訂正いたします。

昭和四十三年十一月号

お角力^{すもう}さんが、絶えず人一倍稽古を励んでいなければ、本場所の土俵に上つてよい成績が得られないように、書を学ぶ者もまた、平生精進を怠らず、常に前進を続けていなければ、人に挺^{ぬき}んでることは出来ない。手習は坂に車を押す如し、油断をすれば後に戻るぞ。

昭和四十三年十二月号

結構、点画、布置に至るまで、あくまでも芳翠流に似せようと努めたもの、大体は芳翠流によるけれども、細かいところはあくまで自分の流儀で押し切ろうとしたもの、芳翠流はあらましを得ればよいとして、どこか自然に好める他流をとつたものと三つがある。

昭和四十四年三月号

森羅万象皆師友という言葉がある。世の中の現象すべてが師であり、友達であるという意味である。大空を高らかに舞う鳶、巣籠りの鶴、さては同僚との餌の奪いあい、兎と亀との競争、仔細に見ていると、世の中の出来ごと何一つとして筆道と無関係の物はない。

昭和四十四年四月号

平成二十九年七月二十五日 初版発行

観 鶯 小 記

(非売品)

編者 小林 松篁
発行 青 鳥 社

熱海市下多賀一五四五・九